

会 議 議 事 録

1 会議名	第2回長岡市スポーツ推進計画策定検討委員会
2 開催日時	令和8年7月31日（金）14：00～15：30
3 開催場所	さいわいプラザ4階 401会議室
4 出席者名	策定検討委員：8名 西原康行委員長、淡路弘幸副委員長、糸満盛人委員、 田中佳苗委員、土江由紀委員、松永哲一委員、室賀大 樹委員、山岸麻美委員 オブザーバー：株式会社ジャパンインターナショナル 総合研究所 1名 事務局：8名 小池市民協働推進部長、中山スポーツ振興課長、佐藤 課長補佐、渡辺係長、菊地係長、井木係長、池田主査、 豊田職員
5 欠席者名	2名（川上美彦委員、綱紀子委員）
6 議題	長岡市スポーツ推進計画（骨子案）について
7 審議結果の概要	・議題について、事務局より説明を行った。各委員から 意見が出された。

8 審議の内容	
委員長	それでは、議題に入ります。
(議題)	長岡市スポーツ推進計画（骨子案）についての説明（事務局説明）
委員長	長岡市スポーツ推進計画（骨子案）のビジョンと目標について非常に大きな方向性だと思うが、何かご意見、ご質問あれば。
〇〇委員	他の市町村のビジョン並びに目標との比較が十分に出来ていないが、比較的スポーツはするものと設定されることが多いと思う。前回の設定よりも関わるという形で広げられているところは、参加のハードルが低くなるのが良いと思う。人口が減少していく中では妥当だと思うし、プロスポーツ球団は価値を提供する役割があり、連携の土台や幅を広げることができると考えている。
〇〇委員	目標のところの「ウェルビーイング」という言葉は国のスポーツ基本計画の中でも出てくる。以前「ウェルビーイング」というタイトルを付けて事業を行ったことがあるが、この用語を知らない方が多かった。言葉の意味について補足説明があると、市民にとって分かりやすいのではないかと。国のスポーツ基本計画を見ると、「ウェルビーイング」は人々の生活や心を豊かにするという風に書いてあるので、その一文が入るといいのでは。
委員長	「ウェルビーイング」は次の第4期スポーツ基本計画に出ているが、まだ一般の方にはなかなか認知されていない。一言前置きがあっていいのでは。
〇〇委員	裾野を広げるということで、市民のスポーツ参加率を上げようと体験会をしても、スポーツが身近な人であれば参加しやすいが、それ以外の方は参加するハードルが高く感じる。その裾野を広げるために、地域にあるコミュニティセンターを活用するとか。以前の会議でもお伝えしたが、健康診断のように市民が必ず来る時に、健康体操やストレッチを「スポーツ」という言葉を全面に出すのではなく、身体を動かすことの心地よさを

委員長	市民に伝えることで、より参加しやすくなるのでは。私の理想ではあるが、いろいろなジャンルとスポーツを組み合わせると、さらにいいのではと思っている。 どうしても我々はスポーツだけで、例えば行政の中でもスポーツ部局だけで考えがちだが、そこに福祉部局など様々なところが入って一緒になっていくと、もっといろんなことができると思う。これは基本目標２で、例えば全ての市民が親しむスポーツ機会の充実がこれから出てくるが、その中のスポーツに関する施設だけではなく、もっと広くいろいろなところでスポーツや運動の機会を広げていけるといいと思う。 このビジョンのスポーツに関わるというのは、スポーツをする人だけではなく、観る人、支える人と全ての人を意味するのでよかったか。
事務局	はい、そうです。
〇〇委員	「楽しい」「好き」と感じることを起点にという言葉ですが、この後の現状課題にも出てきているが、最初に持ってきたのがいいなと思う。
委員長	ビジョンがあってそれを具体的な目標に落とし込んで、その目標の中の一つの文言をきちんと基本目標に落とし込んで体系化されていると思う。
〇〇委員	すべての市民が親しむスポーツ機会の充実という中で、スポーツをする環境が整っている場所というのが少ないなと思っている。体育館で空調の無い所は夏場結構暑く、その中で運動するのは嫌だという意見もあるので環境を整えられたらいいのでは。
委員長	基本目標４にあるスポーツを支える体制と環境の整備の中に盛り込まれている。
〇〇委員	今部活動の地域展開をスポーツ協会が運営主体として行っているが、スポーツと吹奏楽や合唱もやっている。スポーツと文化の境界は、年々曖昧になってきている。実際にスポーツ少

	年団にもかるたがある。そう考えると、スポーツといえばバスケットやサッカーと思いがちだが、今後は境界線がなくなっていくことも考えていかないとはいけない。
委員長	上位計画の総合計画の中にスポーツは位置づけていると思うが、文化活動についても総合計画に位置づけているのか。
事務局	スポーツも文化も総合計画に位置づけている。
〇〇委員	ダンスはどちらに入るのか。
〇〇委員	ダンススポーツ連盟は日本スポーツ協会に加盟していて、オリンピックでもブレイキンがあるが、社交ダンス連盟はスポーツ協会にも加盟している一方でレクリエーション協会にも加盟している。
事務局	ヒップホップは、スポーツの方でも補助金を出したり、文化の舞台芸術としてリリックホールに申請があれば出したりしているので、境目がどっちがどっちとはなんとも。
委員長	スポーツの範疇と文化の範疇が段々難しくなっている。
〇〇委員	今後視点として持っていないといけないと思う。
〇〇委員	私のようにスポーツに全く関わってきていない人もいると思うが、これは目標もビジョンも紐づいていて読みやすい。する方は全く関心がないが観るのは好きなので、ルールが分からなくても推し活のような形で楽しんでいる。そういう楽しみ方も含まれていて、スポーツをすることを強制されていないのが良いと思う。
〇〇委員	前回の話の中でやらされるのではなく、自分から進んでやるというのが大事だというのが全面に出ていていいなと思う。
委員長	皆さんに肯定的なご意見をいただいたので、ビジョン、目標についてはここまで。続いて基本目標について、今日は現状と

〇〇委員	課題そして方向性についてご意見を伺いたい。 まず、子どもの成長を支えるスポーツ環境の充実ということで、子どもを中心に考えたスポーツ環境、これについて現状と課題、それから方向性についてご発言いただきたい。 現状と課題の中で二極化という言葉が使われているが、体育授業で十分な運動時間が確保できない児童生徒が増加している。運動する子どもとしない子どもの二極化が進んでいる。また、運動スポーツに対して苦手意識を持つ子どもが一定数存在している。勝敗や順位付けによって他者と比較されることへの抵抗感があるという記述内容についてはその通り。しかし、今の子どもたちが団体競技を敬遠する傾向がある中で、それが二極化の原因となるという因果関係の説明としては、やや飛躍があるように感じる。もう一步踏み込んで整理すると、子どもたちのスポーツへの参加目的や志向が多様化している。先ほど〇〇委員も言われたように、子どものスポーツはまだまだ部活を中心に発展してきたのがあって、勝利を目指してみんなで頑張る、辛い先に栄光を勝ち取るというような感じ。少年漫画もどちらかというと努力した先の勝利に向かって頑張るところが入口になっているというのがまだまだある。一方、子どもたちは勝利というよりも仲間と一緒に楽しみたい、その場所にいたい、そういう志向が多様化している。現状少年スポーツクラブの実態という、まだまだ競技志向が強く、その志向に合っていない。子どもたちが離れていくということの二極化、多様化ということを整理して盛り込む必要があるのではと思う。
委員長	現状と課題の一番最後のところに志向の多様化による競技志向の強い活動とのミスマッチというのがあるので、この辺りを二極化のところにもうまく盛り込んでもらえると。
〇〇委員	その多様化の受け皿が対応しきれていない。関わりたいのに関われない子どもがいるという実態がある。
〇〇委員	大人の側にも問題があるかもしれないですね。
〇〇委員	指導者もそうかもしれない。

〇〇委員	私は柔道専門ですが、日本の中央競技団体が作っている育成プランもジュニア期、子ども期は楽しさ、主体性など、競技志向、勝利だけではない評価の多軸さを指導者が持つということを言っている。実態としてローカルの指導者育成までプログラムとして落とし込めているかという、まだまだ甘い段階だと思う。それでも課題感として市のスポーツ推進計画の中にも、きちんと入れるという事は、スポーツ関係者も認識できるのでは。
〇〇委員	プロの世界で見ていると指導者受難の時代だな、と感じることがある。指導の時にプロであっても、かなり気を遣う部分がある。極端な話、そういった風潮を選手が悪用するケースが実態としてあつたりする中で、非常に難しい。今教えているコーチ陣は、自分たちはそういう指導を受けていないので、すごく困るだろうなと思う。そうはいつでもスポーツをビジネスとしているので、勝たないと始まらない部分は感じている。それだけではだめだというのは、よくわかっているがやはり勝たないとな、と。それを敬遠するような子どもたちが増えているというのは、不安な感じはします。どの競技も同じかも知れませんが、指導する側には、これまで以上に高度な対応が求められると感じる。
〇〇委員	その観点で思うのは、まず遊びがなくなっている。地域で遊べる環境が全くないので、遊びから入っていない、ゲームを遊びとして経験していない子どもたちが圧倒的に多い。その上でスポーツ少年団や競技団体のジュニアクラブに入ると、最初から競技になる。本質的なスポーツの遊びを経験していない。例えばバレーボールやテニスなどのスポーツの本質的な楽しみというラリーが続くこと。しかし競技となると相手に点を取らせない、ラリーが続かないようにすることになる。そこから圧倒的に入りすぎているというのがあって、やはり遊ぶ楽しさというところから子どものスポーツは入らないと敬遠される。その競技に行く前の段階がすっぽり抜けている中でいきなり競技で勝たないといけないというところで、日頃の活動が練習になる。最初から試合に勝つための練習になっているので、今なんとかしていかないと、ますます子どもたちがスポーツから離れるという現象になると思う。

委員長	国もマルチスポーツというのを掲げているが、それは子どもが小さい頃から同じ競技団体での活動になるので、それを崩そうよ、という事。まずは遊びから入って、いろんな体験をして高校生くらいになったら徐々に専門的なことをやってはどうでしょうというような案が出ているので、これから制度としてクリアできればいいと思う。
〇〇委員	遊びや楽しさから入っていくと、必ず子どもたちがうまくなりたいと思う。うまくなるとゲームがしたくなる。ゲームがしたくなると勝ちたくなる。よく勝利至上主義と楽しさという対立概念で語られることがある。全然そうではなくて、志向の順番なので、それを楽しさ、うまくなりたいが全くなしに競技から入るとバーンアウトが起きる。志向の順番が大事だと思っていて、まず小学生中学生期はちゃんと楽しむ、その上で競技ということをやらないと嫌になる子が多くなると思っている。
〇〇委員	遊ぶ機会が減ってきているというのは、物理的にそういう場所がなくなっているということか。例えば、私の子どもの頃は、近くの空き地でゴムボールで野球をやっていたが、そういう場所がなくなっているのか。もしくは、子どもたちは別のところに時間を取られているのか。例えば、ゲームやスマホを使うとか。多様化なのかもしれませんが。
委員長	小学5年生を定点観測すると、20年前は約80%が公園に行っているが、それが今は10何%です。それは公園がなくなったわけではなくて、やはり社会環境が変化してきたこと。大人たちがそういうものを許容するであるとか、あとは家庭ですね。子どもたちの行動スタイルが変わってきている。その中で先ほど〇〇委員がおっしゃったように、子どもたちが遊びを通して学んできたが、そういうものがなくなっている。
〇〇委員	かくれんぼみたいなものから入ったりというのがないということか。おにごっことか。
委員長	そういうことです。

〇〇委員	ここで少し整理します。〇〇委員が運動する子としない子の二極化が進んでいるというところがあるが、加えてというよりも志向の多様性によって競技志向の強い活動とのミスマッチがあるということですね。
委員長	はい。
事務局	それが逆にいうと、運動する子どもとしない子どもの二極化につながっている。今並列になっているがそこを少し変えていただいて。
委員長	はい。 欠席された〇〇委員からも同じようにご意見いただいているので、紹介させていただきたい。まさに〇〇委員が言われたところを同じようにおっしゃっていた。二極化のところについては、する子としない子が半々というように感じるが、現状はしない子の方が圧倒的に多い。ずっとスポーツをしていないわけではなく、ニーズや志向が合わなくてやめてしまった方が含まれているのではないか。それから勝敗や順位付けを子どもが嫌がる原因もあるが、学校の部活動には参加しているが、Come100クラブ等には参加していない子もたくさんいる。大会を目標にするのではなく、楽しさを重視し、自分のペースでできる活動の充実が必要ではないか。大会参加を目標にすると、自分のペースでやりたくても休みにくい現状がある。もっと気軽に参加できるスポーツ環境を整備していくべき。自信をつけた子どもが大会への参加につなげる仕組みも作れるとなお良い、とのことでした。
事務局	そうですね。ではこれらを踏まえて少し文言のところを修正してください。
〇〇委員	はい。
〇〇委員	遊びの不足は勉強会やスタッフ会議でも、コロナ禍以降かなり出ている。発達に課題のあるお子さんが増えているという話も聞く。すごく今センシティブな時代で、先ほどのスポーツ指導者と一緒に怒れないことに悩まれるお父さん、お母さん多い

	るので、すごく時代の変化を感じている。発達段階に応じたスポーツ活動を行う上でも、幼少期における遊びの不足がそのまま学童期にどんどん繋がっていくので、もう少し体を動かして遊べる機会が幼少期からあれば良い。スポーツ体験や講座をやっている保育園や体操教室、おそらく子育ての駅もそうだがもう少し繋がるといいなと思う。あと遊びでいえば、鬼ごっこが5分持てばいい方。捕まえられなくて泣く、捕まって泣く。かくれんぼは見つけられなくて、帰ってしまう。屋根付き広場を見ている、今までなかったような怪我が起きたりする。ぶつかり方が下手なので、うまく転べないのもよくある。スポーツクラブに入るような子どもは恵まれている。一般的な子どもはそういう環境に置かれていないので、せめて鬼ごっこなどの遊びを楽しめるような環境にしたい。
委員長	主要施策のところに入っていくが、運動が苦手な子どもへの支援というの、体験から継続につながる。やはり遊びを体験するというのがすごく大事。スポーツ体験と同時に何かハードルの低い遊びを。
〇〇委員	遊び方体験ですね。童歌とか、子どもとの関わりという講座は軒並み満席になる。いないいいないばあはどうしたらいいですかと、真面目に質問される時代。今のお母様方が悪いというよりは、今の50、60代の女性達の共働きが始まった世代からの育児継承がなかったということなので、今のお母様方を責められない。誰が教えるのかと言えば、社会だと思うのでこういう機会があればいいなと思う。
〇〇委員	勝敗を決める、順位をつけることで他者と比較されるというところで、私の地元の学校では今回車いすリレーというのを運動会に取り入れた。練習の時には運動会なので勝敗を決めてやろうとしていたが、グラウンドを一周するのでインコースの方が早くなるのでは、ということで子どもたちがもめ始めたので、最終的に直線で勝敗をつけないですと決まった。子どもたちと意見交換をした時にどうして勝敗をつけなかったのか聞いてみると、誰々がこのチームにいるから嫌だとかいじめにつながる言葉を言いたくないので勝敗をつけずに楽しくやりましょうということでこういう形になった。運動会からそうい

委員長	う風に子どもたちの意識が変わってきているというのは、スポーツをしている私の中では悲しい現状だなと思った。 小学校中学校の体育授業の学習指導要領の中で、順位つけるのはどうなんだろう、ということになってきている。小学校中学校の運動会では一時順位をつけないとなっていた。でもそれは本来のスポーツとは違うという話になって、また順位をきちんとつけるようにした。ただ、ここにきて順位をつけることに耐えられない子どもが出てきたりして、逆転したりして模索している。難しい。
〇〇委員	市民活動団体から最近話があったが、幼稚園から小学校に上がるタイミングでスムーズに学校に行かせたいという生徒さんの相談が増えている。登園しぶりをするお子さんがそのまま小学校への接続がうまくいかないケースがあって、小学校から不登校が増えるというお話があった。幼稚園でもなく小学校でもない、違うコミュニティの中で集団遊びをするという取組みが出来ないかという風に考えておられる任意団体がある。ただ任意団体で動くと体育館を借りるとなると使用料がかかるので、その部分を親御さんに負担していただく、且つ活動してくださる皆さんもボランティアなので、継続的な事業にはならないという課題がものすごくある。そういった面がもう少し補助的なもので何か変わるといいなと思っている。今は一回当たりの参加費が高くなってしまって、潤沢な家庭の方、親子しか参加できないという現状は増えてくるな、と。活動としてはとても良いのでそういう取組みをもっと任意団体で広がればいいなと思う。そういう流れを取り込めない、続けられない課題があるのかなと思うので、その部分を行政のサービスの中で改善や手助けがあればいいなと思う。
委員長	施策の部分はこれから考えていくところですが、多様な主体による受け皿の創出とか、そういうのがあればいいのかもしれない。民間と公的な所と任意団体もそうですね。
〇〇委員	施策の方向で、特に運動をする子どもとしない子どもの二極化というところがあるが、競争や勝敗を過度に重視した従来のスポーツのあり方から、楽しさを実感できるよう、と書かれて

	いるが、競争や勝敗は過度に重視してはいけないが、本当にスポーツの本質的な面白いところの価値なので、遊び・楽しさを土台として、それを通じてもっとやりたい、うまくなりたい、挑戦したい、そういう主体的な意欲を育むことを重視するなど、そういう表現にすると良いのでは。その方が誤解がない気がする。そのあとに出てくる競技スポーツや競技者育成は、挑戦意欲や楽しさの先にあるので、是非整理してもらいたい。また、志向に応じて運動やスポーツを楽しめる環境作りというところをもう少し具体化した方が主要施策につながっていくのでは。特に部活の地域展開を契機にして、長岡市教育委員会から長岡市ジュニア環境全体構想というのが示されているので、それをここにしっかりと位置付けることが大事。具体的にはCome100クラブであったり、総合型地域スポーツクラブ、スポーツ少年団、競技団体、それらを目的や志向やレベルに応じて、選択できる環境作りとして繋げていく導線づくりをしていくということをしかりと明記するべきでは。
委員長	一つ目は競争や勝敗を過度に重視した従来のスポーツを消してもいいかもしれない。勝利至上主義の事を言いたいんだと思う。
〇〇委員	むしろ過度な勝利至上主義とか。
委員長	過度な勝利至上主義という表現にしましょうか。競争や勝敗はスポーツの本質的な所なので、そこは外せないし、追及していかなければならないところ。ここを修正しましょう。
事務局	はい。
委員長	次の基本目標2に行きます。全ての市民が親しむスポーツ機会の充実で、子どもだけではなく大人もというところで何かありますか。主要施策の例としても挙げていただいたが、それも見ながら。
事務局	欠席した〇〇委員からご意見いただいているので、そちらを紹介させていただきます。 仕事や家事が忙しくてスポーツをする時間がないというの

〇〇委員	は、昔からずっと言われている話。24時間営業しているジムも市内には増えてきているので、個人のライフスタイルに合った実施方法を提案していく必要がある。また多様なニーズに対応するためにも、行政、民間、個人等が行っているイベントや活動の情報が広く伝わる仕組み作りが必要と考える。興味がある人は自分から積極的に情報を探しに行くので、関心がない人にも目につくような情報発信の仕方を検討していくべき。それから部活動の引退後や進学、就職のタイミングのところで、部活動の地域展開を進めている今、ジュニアだけではなく、生涯を通じて地域でスポーツを親しめる環境作りをしていく必要があるのではないか。自分のホームとなるクラブ、チームがあれば一度離れてしまっても、戻って再開する機会が増えると考え。自身が行うだけでなく、支え手を考えてもホームは必要。ホームが部活動だと再開したくても戻る場所がない。スポーツ少年団、中学校部活動、高校部活動、大学部活動というふうになっているが、その都度入部と引退を繰り返すように、ぶつ切りになっているので、そのタイミングで辞めてしまう子どももいる。その一方で例えば武道の道場では小さいお子さんから年配の方まで同じ道場で続けていくような環境があったり、ドイツの総合型クラブでも生涯通じて同じクラブで活動していくシステムがある。そういったものも合わせて考えていってはどうか、というご意見をいただいた。 先ほど〇〇委員の意見にもあったが、総合型地域スポーツクラブがあまり浸透していない、という実情である。こんなところでこんなことをやっているんだな、というのがなかなか伝わっていないというのをすごく感じている。そもそも運動を全くしてこなかった方もいらっしゃるので、スポーツをしようと呼びかけるのではなく、猛暑なので涼みに来ませんか、そこでストレッチしてみませんか、などそういったところから地域スポーツクラブに繋げていくとか、そういう施策があるといいなと思う。あと親子一緒に、となると子どもが主役になり、ついてきている親は結構運動不足。ストレスも抱えている。子どもを預ける機会があれば、また違うのでは。これは介護でも同じ。介護をされる側はフォーカスされるので、運動してみませんか、とか脳トレもあるが、介護をしている側はすごくストレスが溜まっている。肩こりだったり、腰痛だったりがあるのにそ
-------------	---

	んな時間がないという方が多いのでは。介護や保育の施設でなんとなくでもいいので、スポーツを繋げていけるといいのかな。会社勤めの方も時間がないとよく言われるので、会社との連携もあると良い。企業でスポーツや運動した方がいいですよ、という評価を健康診断でもらったりすると思うが、そこに繋がる何かがあればもっと裾野が広がるのでは。
委員長	どうしてもスポーツと書いてしまうと、そうになってしまう。何かいい表現があれば。
〇〇委員	リフレッシュとか。
〇〇委員	施策の方向のところで、それぞれの志向に応じて生涯を通じてスポーツを親しむ、と書いてあるが、これも先ほどのビジョンと合わせてになるが、関わることができる環境の整備、に変えた方がいいのでは。〇〇委員もおっしゃってましたが、親しむというとスポーツをするということがメインという捉え方をされると思う。関わるというのであれば、例えば支え手として関わる、指導者として関わる、というふうに導線が見えてくると思うし、今後は〇〇さんがおっしゃったようにぶつ切りのスポーツ振興、ぶつ切りの受け皿ではなくて、今部活動も地域展開になったので、幼少期から高齢者までが一つのクラブにずっと居続けることができる、多世代型のスポーツ受け皿育成というのが大きな鍵になってくると思う。一つには高校生の部活が今、無くなってきているという現状。中学校卒業後の子どもたちの受け皿もこれからどんどん課題になってきますし、ライフスタイルに応じて一旦離れても、川上委員の意見にもあったが、またホームとして戻って来られる居場所作りにもなると思う。多世代型だけでなく、応援や観戦といった関わり方もできる受け皿作りや、関わり方を変えてもずっと関わっていけるような受け皿、クラブ作りというのが鍵になってくる。
委員長	方向として断片的には盛り込まれてはいるが、それを一つ掲げたほうがよいか。ライフスタイルや目的に応じて無理なくスポーツに親しむということ、一度離れてもライフスタイルに応じてもう一度入ることができる、というような受け皿、クラブライフができるような、ということですよ。

事務局	施策の方向で、また総合型地域スポーツクラブ等をはじめとする地域のスポーツの拠点を活用し、多世代が交流しながら、それぞれの志向に応じて生涯を通じてスポーツに親しむことができる環境の整備を進めると記述してあるが、ここは〇〇委員の意見と一致する部分である。
委員長	そうですね。あと、〇〇委員がおっしゃった企業とうまくやるということも、8ページのところで、健康増進のための運動習慣の定着の推進というところで、例えば企業における各種健康講座を開設するとか。今は企業の中で社員の方がいろんな運動したりすると健康ポイントが加算され、なにか税制上の優遇につながる取組があったり、他の自治体の中でもある。企業が健康に取り組める、健康講座だけに限らず何か仕組みがあればいいということですよ。
〇〇委員	最近会社の昼休みや終業後に、フィットネスという形でヨガやピラティスを行っている企業がある。そういうのが広がっていくと、すごくいい。以前タニタさんが万歩計をつけて歩くとポイントが貯まるというのをされていたが、そういうちょっとしたきっかけで、気が付いたらポイントが貯まっていた、気が付いたら運動をしていたという仕組みがあればいい。
〇〇委員	健康増進課でそういうアプリありましたよね。
委員長	書いてありますね。運動習慣定着に向けた健康アプリの活用。
事務局	いただいたご意見を具体的な施策に繋げられるかどうか、関係課と相談したいと思います。
〇〇委員	運動する機会は十分あるがPRが不足しているのか、なぜ足が向かないのか、そもそも運動する機会、楽しむ機会が無いので、これを充実させて増やしていくというところなのか、市として現状どんな捉え方になるか。
事務局	市民アンケートの結果を見ると、やっている人はやっている

	し、やっていない人は全くやっていない。やっていない理由を見ると、仕事が忙しい、子育て・家事が忙しいという意見が多かった。一方でスポーツ自体は好きだという方も多かった。好きだけど、何らかの阻害要因があって出来ていないのではないかという分析はしている。具体的に子育てだと、子どもを置いて外に出られないというのがあるので、今回の計画では託児機能を付けたサービスを提供していくとか、そういったところは具体的に考えている。
〇〇委員	では受け皿は十分ではないかも知れないが、ある程度あるということか。
事務局	そうですね。ただ、足りない部分を今後補っていく必要はあると考えている。
委員長	次基本目標３です。競技選手の育成と活躍を通じた感動の創出について、いかがでしょう。
〇〇委員	現状と課題のところ、競技のハイパフォーマンス化が全国的には進んでいる。インターハイレベルならできるかもしれないが、市町村一つだけで全国や世界で活躍する選手、オリンピックや年代別の日本代表となる選手を育てるとなると非常に厳しくなっているという現状も視点として加えた方がいいのではと思う。あと、小さい頃から競技の専門的なトレーニングをずっと課して、ふるいにかけて生き残った子どもをさらに強化してトップオブトップを目指すという従来型の選手育成強化モデルは、世界・全国的にもすでに行っていない。子どもの頃から競技をやってきたことによるバーンアウト、もう競技をやりたくないと離れていく、という事にも繋がってきているので、先ほどの子どもスポーツのところの現状・課題感と一致させた方がいい。今、日本の少年スポーツ振興は低迷しているにも関わらず、大谷選手や堂安選手などトップ選手のレベルは上がっている。なぜか、というと自分で考える、主体性を持って自分が挑戦したいと努力できるアスリートが伸びているという状況がある。従来型のものではなくて、遊び・楽しさを起点にもっとうまくなりたい、挑戦したいという子どもたちに対して、環境支援をしていくという視点を現状と課題に盛り込ん

	でもらいたい。
委員長	長岡市だけではなく、多様なところを活用しながらやっていくということですかね。
〇〇委員	長岡市だけでは限界があるというのが現状課題としてある。
委員長	実際に新潟県スポーツ医科学センターも国立スポーツ科学センターと情報共有している。あそこに行くと、トップレベルでできるようになっている。市だけではない、いろいろな機関と連携しながらということですね。あとは、マルチスポーツ。ここで失敗しても次に違うところに行けるという複線ですね。
〇〇委員	施策の方向では、競技選手の育成と競技力の向上を図る、と書かれているが、競技選手という位置付けを、しっかり定義づけることが必要。例えばスポーツ少年団であっても競技選手だし、親善水泳大会に出るのも競技選手になる。まずは、長岡市が目指す競技者像、育成アスリート像をしっかりと定義づけることを提案したい。長岡の米百俵の精神とか、地域への感謝と誇りを持つ、とかそういった育成像をしっかりと持つことと位置付けることが大事。それと施策の方向の、特にジュニア期においては、のところで、こちら先ほどの少年スポーツと合わせて楽しさから入って、うまくなりたい、挑戦したいというその主体的な意欲を育んだ上で、というのを是非追加していただきたい。現在問題になっているスポハラ、スポーツ活動におけるハラスメントですが、短期的に早く成果を出したいということで行われることがあるので、こういったスポーツハラスメントやインテグリティをしっかりと明記いただいた方がいい。加えて、先ほど長岡だけではトップレベルの選手を育成するのは限界があるというふうに言いましたが、一方で全国の自治体では、その自治体独自の強みを活かして、特定種目において世界レベルの選手を育てようとする取り組みも進められている。長岡であれば、飛込の施設、体操の練習場という専門施設もあるし、それに付随して選手を育成できる体制も揃っている。長岡ならではの強みを生かした競技力向上政策を施策の方向として入れてみては。

委員長	長岡でどういうアスリートを育てるのかという方向性をきちんと定めるということですね。長岡らしいアスリートとは何か。事務局よろしいですか。
事務局	はい。
委員長	では、次にスポーツを支える体制と環境の整備です。ここは指導者のところもあって、先ほど〇〇委員がおっしゃっていたコンプライアンスやガバナンスのところはここに盛り込んでもらいたいということですよ。
〇〇委員	はい。
〇〇委員	スポーツコンパスは長岡市が作ったんですよ。
委員長	あれいいですね。長岡市はスポーツの指導者に関する推進ガイドラインとか、何かあった時のセーフティネットを張るというような協議会も立ち上がっていて、もちろん部活動の地域展開もそうですが、非常に全国でもトップをいっていて、非常に充実している。先ほど〇〇委員も言われていたが、コーチや指導者の在り方が難しいという話があったが、指導者育成をきちんとやっていくということですね。
〇〇委員	最初に教わる人がどういう接し方なのかというのは大きい。そこを間違えると、さっき言ったみたいに拒否してしまう子どもたちが増えるだろう。その部分はおそらく競技の枠を超えて、大事にしないといけない柱だと思うので、指導者に最初にきちんと教えて、認識させることが大事。
委員長	コーチライセンスを取る時には、〇〇委員もおっしゃったように自分がアスリートとして経験してきたことを一度全部クリアして、コーチとしてどうやっていくべきだということを研修で実施してきているので、そういうコーチに教わる子どもたちはきちんと育ってきていると思う。 他にご意見等はありませんか。

〇〇委員	では最後です。スポーツによる交流と地域活性化の推進です。今回第4期のスポーツ基本計画の中ではウェルビーイングと、もう一つスポーツで社会が変わるという、社会課題を達成していくという大きなところがある。多分基本目標はそういったところだと思いますが、いかがでしょうか。 ぐんぐんのスタッフにアルビ BB のコアなファンがいて、何とかぐんぐんのバスケットコートに選手が来てくれないかなと言っている。そういうところから普段は来ない方が来てくれたり、普段スポーツやバスケットをしない方が利用してくれたりする。身近な大人が取り組んでいないスポーツには、子どもは参加しにくいので、交流だったり観光イベントだったり、競技なので勝敗やスキルアップの過程も大事ですが、観る側が楽しめる観光資源としてはいい。配信者同士だったりファン同士が関われるファンミーティングがあると楽しいだろうな、と思うので、こういう視点が入っているのは素晴らしい。
〇〇委員	我々からすると、ビジネスなので全ては集客にあると思っている。集客の要素は何かというと、先ほど言ったように勝つ事。勝って集客が上がると、収益が上がり、投資に回せて、さらにコンテンツに磨きをかけることができるという、これを回していくことが大事だと思っている。究極の状況でいくと勝っても勝たなくてもお客様が来る状況になると経営はすごく楽になる。長岡市と連携させていただいている関係で、小学校中学校にコーチや選手が訪問している。また、今3階席は小学生以下無料にさせていただいて、去年は5,800人くらいお越しいただいた。ビジネスの観点でいくと子どもが来ると必ず大人がついてくるので、その好循環を生み出していきたいと思っている。あとはやり切れていないのは、アウェイに来た人にもっと長岡を感じて帰ってもらって、また来たいと思ってもらいたい。30試合県外チームのブースターが来るので、市からも経済効果が図れませんと言われる。見に来ていただいて、バスケットボールはスポーツ競技ではあるがエンタメ感も強い。入口としてはすごくいいのでは。先日十日町でバスケットボールのクリニックをやった。小学生や中学生からしたら、近くで選手を見るだけでも非日常感がある。普段見た事がないような大き

	い選手が見れるというだけでも面白い入口になるかも知れない。なのでもっと外に出て行かないといけない。今季は選手との接点を増やしたい。
委員長	すごいことですよね。
〇〇委員	どこの市町村にもあるわけではない。バスケットで言えば55球団しかないの。アオーレがいいのは、駅から近いのでアウェイに喜ばれる。
委員長	滞在してもらうというのはとても大事。いかにお金を落としてもらうか。
〇〇委員	毎年7月に開催されている世界えだまめ早食い選手権というのがあるが、そのイベントの立ち上げから関わっている。今だと県内より県外のお客様が多く、とくに若い方は3日間くらい滞在されて、長岡を周遊して帰られる方が多い。例年だと日曜日開催のため、そのまま帰ってしまう方が多かった。今年は土曜日開催したこともあって一泊してもらえそうな導線を作った。市内の飲食店の方にもイベントが終わった後にさらに枝豆を提供してもらえないか、とお願いをして、独自にマップを作って選手の方にもお配りをした。アルビさんもすでにされていると思うが、アオーレだけではなく、他の施設との取り組みがもっとできると、バスケットボールに関わりがない人や、運動していない人でも、盛り上がっているからアオーレに行こうかな、という人が増えるといいなと思う。 あとボウリング競技の国スポの運営をしているが、本大会ではないがブロック大会の開催県が5年に1回くらいの割合で回ってくる。そのタイミングで同市で行われているいろいろな競技を見て回るというツアーをやっているところがあると話で聞いた。ボウリング競技者が同じ市でしているバスケの競技を見て、ボウリングを見て、フェンシングを見て、というところがとても面白かった。プロではなくアマチュアだけれど、国スポの県代表として出ている選手を見ることで、もしかしたら自分もなれるかも、という動機付けに繋がっているというのをボウリングの会議で聞いたことがある。北信越大会であると、5年に1回回ってきますし、2028年には長野が国スポの開催地

委員長	になると思うので、北信越ブロックとしてもそれに向かって盛り上がっていくのかなと思うと、そういったところも隣の県として活用できたらいいな、と思う。 イベントを起点とした地域内交流とかですね。 先ほど〇〇委員が言われたことは、多分今、国のスポーツ推進計画の中でもシビックプライドという、プロチームがあることによって長岡市民の方がプライドを持つ、あるいは地域ロイヤリティ、愛着心とかですね。その醸成につながる、その辺りを入れとくといいかもしれませんね。市外から人が来て交流するという。あと長岡市民がプロチームがあることで、どう変わるかみたいなのところを入れるといいですね。 ありがとうございました。 全体通して何かございますか。では今日いただいた意見を踏まえて反映させていただければと思います。 以上で会議を終わります。
9 会議資料	別添のとおり